

# 日本泌尿器科学会甲信越合同学術大会

(第159回信州地方会・第65回山梨地方会・第342回新潟地方会)

## 《プログラム・抄録集》

日時:平成19年6月9日(土)午後14時00分

会場:NASPA ニューオータニ 1階『鳳凰の間』

新潟県南魚沼郡湯沢町 2117-9 025-780-6111

参加費:3,000円

世話人:羽入修吾(厚生連刈羽郡総合病院泌尿器科部長)

※ PC発表のみです。(Windows Power Pointのみ受付致します。)

データは、USBメモリー、CD-ROMでご持参下さい。

※ 受付は、13:20より

※ 口演時間は、1題6分。討論3分

951-8510 新潟市中央区旭町通1の757

新潟大学医学部泌尿器科学教室内

**日本泌尿器科学会新潟地方会**

TEL:025(227)2289/FAX:025(227)0784

会長 高橋 公太

14:00-14:05

開会の挨拶 羽入修吾（厚生連刈羽郡総合病院泌尿器科部長）

14:05-14:59

座長 水澤弘哉（長野病院）

## 1. 膀胱原発小細胞癌の二例

長岡赤十字病院 泌尿器科 村山慎一郎、小林和博、米山健志、森下英夫

膀胱原発小細胞癌は比較的稀な疾患で予後は極めて悪い。二症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例1は65歳、男性。検診尿潜血陽性にて'05年9月初診。膀胱腫瘍あり、TUR-Bt→小細胞癌>UC、G3で、11月膀胱全摘除術施行し、UC、G3、pTis、N0であった。経過観察していたが、'06年2月CTにて肺、肝転移出現し、PE療法→PR。8月骨転移出現、肺、肝転移再増大し、CPT-11によるサルベージ療法を行うも11月死亡。症例2は89歳、男性。便潜血陽性精査の際、エコーで膀胱腫瘍指摘され、'07年2月初診。TUR-Bt→小細胞癌、G3、pT1であった。高齢でもあり経過観察している。

## 2. 22歳前立腺原発小細胞癌の一例

長野市民病院

上垣内崇行、岡根谷利一、西澤秀治、中山剛、皆川倫範

症例22歳男性。2005年11月、以前より認められていた排尿困難の増悪、右大腿部痛を主訴に当科受診、画像所見にて前立腺より連続して膀胱内に進展する腫瘍を認めた。腫瘍生検にて前立腺原発小細胞癌、リンパ節転移T4N1M0 stageIVの診断となった。肺小細胞癌の治療に準じて化学療法、放射線治療を行なった。

## 3. 骨盤内リンパ節転移をきたした表在性膀胱癌の一例

山梨県立中央病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、病理検査部<sup>2)</sup>

小泉孔二、入江恭子、横山仁、保坂恭子、竹崎徹<sup>1)</sup>、小山敏雄<sup>2)</sup>

65歳、女性。平成15年4月4日初診。膀胱鏡にて広基性乳頭状膀胱腫瘍を認めた。平成15年4月22日TUR-Bt施行、病理診断はUC、G3、pT1であった。その後膀胱内に再発は認めなかったが、平成18年8月内科にてCEA・CA19-9上昇したため当科再診。CT・PETにて両側骨盤内リンパ節腫大を認め、平成18年12月5日開腹生検を施行。病理はUCであった。放射線照射を行いマーカー・画像上CRとなった。

## 4. 粗大石灰化を伴った腎細胞癌の1例

新潟労災病院<sup>1)</sup>、立川総合病院<sup>2)</sup> 信下智広、小池宏<sup>1)</sup>、志村尚宣<sup>2)</sup>

症例は35歳男性。高血圧にて当院内科通院中、CTにて偶然、石灰化を伴った腎腫瘍を指摘された。2006年12月1日、精査加療目的に当科初診。MRIにて左腎上極に75×66×83mm大の腫瘍あり。画像上、左腎細胞癌を疑い、2007年1月25日、根治的左腎摘出術施行。病理所見は、石灰化と一部骨形成を認めた。術後経過は良好で、外来経過観察中。

## 5. 後腹膜神経鞘腫の一例

長野赤十字病院泌尿器科 今尾哲也、天野利康、竹前克朗

症例は60歳代の女性、高血圧で近医通院中に超音波検査にて左副腎に径45mm大の腫瘤を偶然に認めた。CTおよびMRIでは腫瘍内壊死を伴う造影効果のある腫瘤を認めた。内分泌学的検査では異常を認めず、MIBGシンチにて腫瘤に一致して軽度の集積を認めた。腹腔鏡下左副腎摘除術を施行したが、術中血圧の変動は認めなかった。病理組織学的所見は後腹膜神経鞘腫の診断で、悪性所見は認めなかった。術後経過は良好で、外来にて経過観察中である。

## 6. 二分脊椎患者に発生した肉芽腫性精巣炎の一例

山梨大学医学部 泌尿器科

宮本達也 座光寺秀典 土田孝之 野村照久 深澤瑞也 荒木勇雄 武田正之

症例は19歳男性。二分脊椎による神経因性膀胱のため、2003年に当院にて膀胱拡大術を施行し、外来にて排尿管理中であった。本年4月に右精巣腫大を訴えて当科受診し、精巣腫瘍を疑って入院となった。感染の可能性も考えて治療を行ったが、精巣腫大は軽快せず、右高位精巣摘除術を行った。病理検査にて、肉芽腫性精巣炎と診断された。肉芽腫性精巣炎は稀な疾患であり、精巣腫瘍との術前の鑑別は困難である。臨床上の特徴、特に画像診断を中心として考察を加える。

14:59-15:53

座長 荒木勇雄(山梨大学)

## 7. 真性半陰陽(XX male)の一例

信州大学医学部泌尿器科<sup>1</sup>、遺伝子診療部<sup>2</sup>

小川輝之<sup>1</sup>、井川靖彦<sup>1</sup>、川上雅子<sup>1</sup>、井上博夫<sup>1</sup>、西澤理<sup>1</sup>、古庄知己<sup>2</sup>、福島義光<sup>2</sup>

出生時、会陰部尿道下裂、前置二分陰囊、左性腺は陰囊内に触知したが右性腺は触知しなかった。性染色体分析で46XX、精巣決定因子(SRY)は陰性であった。骨盤部MRI、膀胱尿道造影、膀胱尿道鏡、腹腔鏡検査で子宮、膣を認めず、右性腺を腹腔内に認めた。両側性腺はともに組織学的にOvotestisであった。男児として養育する方針とし、両側卵巣摘除、右精巣固定術、二期的尿道陰嚢形成術を施行した。

## 8. 尿道下裂に対するpolysurgeryの後の陰茎部尿道の癒痕を伴う高度狭窄例に対する口腔粘膜遊離グラフトを用いた二期的尿道形成術

山梨大学大学院医学工学総合研究部泌尿器科学<sup>1</sup>、耳鼻咽喉科学<sup>2</sup>

川口真琴<sup>1</sup> 寺本咲子<sup>1</sup> 三神裕紀<sup>1</sup> 土田孝之<sup>1</sup> 野村照久<sup>1</sup>  
深澤瑞也<sup>1</sup> 滝花義男<sup>1</sup> 荒木勇雄<sup>1</sup> 増山敬祐<sup>2</sup> 武田正之<sup>1</sup>

症例:51歳男性、主訴は排尿困難。小児期に数回の尿道下裂に対する手術既往あり、その後、排尿困難が出現したため紹介受診した。逆行性尿道造影では、外尿道口から陰茎部尿道遠位4cm程度が高度な狭窄を呈し、外尿道口の後退と遠位部尿道及び周囲皮膚の癒痕化を認め、最大尿流率は、1ml/秒であった。以上から陰茎部皮膚組織を用いた尿道形成術は困難であり、口腔粘膜遊離グラフトを用いた二期的尿道形成術を行った。術後合併症は特になく、術後最大尿流率は18ml/秒であった。

## 9. 新潟大学 19 年間の移植統計 成績・合併症

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野

田崎正行、諏訪通博、中川由紀、斎藤和英、高橋公太

我々は1988年3月～2006年12月の間に新潟大学病院で193症例の腎移植を施行した。症例は年々増加傾向にあり、内訳は血液型一致102例、不一致26例、不適合34例、献腎移植が31例であった。5/10生着率はそれぞれ94/53%、100/100%、85/61%、72/72%であった、透析再導入の原因としてchronic allograft nephropathy、急性拒絶反応、悪性腫瘍が多かった。移植後の尿路合併症なども含め当院での19年間の腎移植統計について検討した。

## 10. 小切開体腔鏡補助下(PLES)腎尿管全摘術の経験

山梨大学医学部附属病院<sup>1)</sup>、医療法人栗山会飯田病院<sup>2)</sup>、

国立病院機構国立甲府病院<sup>3)</sup>

深澤瑞也、高木孝治、川口真琴、三神裕紀、山岸 敬、羽根田破、間庭章光、

間庭章光、野村照久、荒木勇雄、武田正之<sup>1)</sup>、神家満学<sup>2)</sup>、相川雅美<sup>3)</sup>

泌尿器科手術において安全かつ低侵襲な手技に対しては、医療者のみならず患者側からの要求も高まりつつある。当院でも小切開手術(PLES)は腎臓、前立腺に施行されてその有効性が認知されつつある。今回腎盂尿管腫瘍に対するPLES腎尿管全摘除術の経験を報告する。

標準的には腎 5-6cm、尿管処理は5-6cm 切開で完全な腹腔外の処置ではほぼ通常の手術の応用で可能であった。小さな傷で出血量、手術時間等にもほぼ問題なく可能であった。

## 11. 無阻血腎部分切除術に対するモノポーラ攝子の有用性

済生会下関総合病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、小波瀬病院 泌尿器科<sup>2)</sup> 外科<sup>3)</sup>

占部裕巳<sup>1)</sup>、毛利 淳<sup>1)</sup>、高井公雄<sup>1)</sup>、上領頼啓<sup>1)</sup>、

福田寛典<sup>2)</sup>、実藤 健<sup>2)</sup>、森 尚秀<sup>3)</sup>

近年、画像診断の発達や健診の普及に伴い、無症候の小さな腎腫瘍が多く発見されるようになった。それにとまないマイクロ波凝固装置(MTC)等、種々の方法で小径腎腫瘍に対する腎温存手術が積極的に行われている。今回、我々は小径腎腫瘍に対して新たに作成した生食灌流型モノポーラ攝子を用い2006年9月より無阻血腎部分切除術を計6例施行している。本術式では低温生食にて切除面を冷却し、焦げ付きをなくす事で切除ラインの確認が容易である。また残存した小血管は金属クリップにて直視下に止血した。外側突出型の腎腫瘍に対しては有用な手術方法の1つと考えられる。

## 12. 当科での過去7年間の結石性腎盂腎炎21例の検討

厚生連刈羽郡総合病院泌尿器科 羽入修吾、武田啓介

結石性腎盂腎炎はDICの危険がある救急疾患である。過去7年間に経験した21例を調査した。年齢68±10歳、男女比2:19。症状は発熱、腰痛、嘔気嘔吐が多く、初診は救急外来や内科が18例。SIRSは18例、DICは5例。水腎症は軽度で、尿路ドレナージはPNSが15例と多かった。治療では腎摘が3例、ESWLやTULでの除石が14例、腎瘻が1例で、他院へ転院が3例だった。

15:53-17:10

ディベート

座長 西山 勉(新潟大学)

「前期高齢者(65才～75才)の限局性前立腺癌に対する治療戦略」

1 岡根谷利一(長野市民病院 泌尿器科)

2 斉藤俊弘(県立がんセンター新潟病院)

3 野村照久(山梨大学医学部)

17:10-17:15

挨拶 高橋 公太(新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野)

# イブニングセミナー

日 時:平成19年6月9日(土)

17時15分～19時00分

会 場:NASPA ニューオータニ 1階『 鳳凰の間 』

17時15分～17時30分

〈製品紹介〉

「スミフェロン」

大日本住友製薬株式会社

17時30分～18時15分

〈特別講演Ⅰ〉

座 長 山梨大学大学院医学工学総合研究部 泌尿器科 教授 武田 正之先生

「 HRPCに対するタキサン系抗がん剤を中心とした化学療法 」

島根大学医学部泌尿器科学 教授 井川 幹夫先生

18時15分～19時00分

〈特別講演Ⅱ〉

座 長 信州大学医学部泌尿器科学 教授 西澤 理先生

「 泌尿器科における保険診療 」

埼玉医科大学 泌尿器科 教授 出口 修宏先生

共催 日本泌尿器科学会甲信越合同学術大会

(第159回信州地方会・第65回山梨地方会・第342回新潟地方会)

大日本住友製薬株式会社

※ イブニングセミナー終了後、別室にて懇親会を行います。